

ジャウイが結ぶマレー世界研究

——東南アジア史学会・自由企画シンポジウム「ジャウイ文書研究の可能性」より——

西 芳実*

2002年12月1日、岡山大学において、東南アジア史学会第68回研究大会の自由企画シンポジウムとして、「ジャウイ文書研究の可能性：壁としてのジャウイ、橋としてのジャウイ」が行われた。

川島緑(敬称略。以下同じ)の「見えない仕切りを開けて：ジャウイ文書研究の意義と課題」を皮切りに、西尾寛治「マレー語圏におけるジャウイの概念：表記法としてのジャウイ、人のカテゴリーとしてのジャウイ」、國谷徹「植民地支配下のジャウイ研究：蘭領東インドおよび英領マラヤを事例として」、服部美奈「西スマトラのジャウイ文書：20世紀前半のイスラーム関連出版物から」、菅原由美「ジャワ社会におけるペゴン使用の意味」、山本博之「ジャウイ誌『カラム』から見た1950年代のマレー・イスラーム圏」の計6本の報告がなされた。

報告者は、いずれもジャウイ文書研究会(上智大学、2001年～)のメンバーである。ジャウイ文書研究会では、様々な地域を研究対象とする研究者が集まり、ジャウイについての研究およびジャウイを用いた研究の可能性と意義を探る試みが続けられてきた。本シンポジウムは、いわばジャウイ文書研究会の中間報告といえる。以下では、各報告の内容を順に見ながら、そこに示されたジャウイ文書研究の意義と可能性を紹介したい。

◆ジャウイ文書研究の状況

まず、ジャウイ文書研究会の代表でもある川島緑

が、シンポジウムの趣旨説明をかねて、ジャウイをめぐる研究状況について簡単な説明を行った。

ジャウイとは、アラビア文字を用いてマレー語を表記する方法であり、ジャウイ文書とはジャウイで書かれた資料をさす。現存する最古のジャウイ文書としては、14世紀のトレンガヌ碑文が知られている。以来、ジャウイはマレー語の表記方法の一つとして現在に至るまで東南アジア海域世界の人々に使われてきた。

しかし、これまでジャウイ文書はもっぱらマレー王朝やマレー文学を扱う前近代史の資料として利用され、他の時代や他の分野の研究においては、ジャウイ文書への関心は低かった。

また、東南アジアの現地語をアラビア文字で表記することは、マレー語以外の様々な言語、たとえば、ジャワ語(ペゴン)やブギス語(スラン)に対しても行われていたが、こうした事象についてはあまり関心が向けられてこなかった。

その原因としては、第一に、ジャウイがアラビア文字であることから、ジャウイ文書が宗教と密接な関係にあると考えられてきたことが挙げられる。特に近現代史研究においては、普遍原理の探究や近代化の過程に研究者の関心が集中し、宗教に関する議論、特にイスラーム教に関する議論への関心が低かった。

* 東京大学大学院・博士課程

第二に、アラビア文字が地域固有の文字ではなかったこともあり、ジャウイの表記方法があまり重視されなかったことが挙げられる。このため、なぜアラビア文字で表記されたのか、アラビア文字表記にどのような意味があるのかという問題は後回しにされた。したがって、現地語のアラビア文字表記を体系的に捉える試みもほとんどなされなかった。

◆マレー世界の形成とジャウイ

西尾報告は、ジャウイを通じて書き言葉としてのマレー語が確立されたことがマレー世界の形成と発展を促した側面を指摘した。アラビア文字を応用して作られたジャウイは、母音をほとんど表記せず子音によって表記する。このため、話し言葉では母音の違いとして現われるマレー語の方言差が、ジャウイ表記のマレー語では表面化しない。これは、話し言葉のマレー語を共有しない人々の間で書き言葉のマレー語が共有可能であることを意味する。ジャウイのこのような特質は、ジャウイ文書研究会の各参加者によって収集されたジャウイ表記の事例をもとに奥島美夏氏が一覧にまとめたシンポジウム参考資料「東南アジア諸言語のジャウイ表記の比較」からも見て取ることができる。

また、西尾は、東南アジアにジャウイをもたらした人々として、アラブ・中東地域やインド出身のイスラム商人やイスラム宗教学者の存在に注目した。アラビア語とマレー語の双方を駆使するこうした人々の存在が、インドやアラブ・中東地域とマレー世界を媒介すると同時に、マレー世界の人々を互いに結びつける役割も果たした。西尾は、このような点でジャウイがマレー世界の形成を促したとまとめた。

◆多重文字状況:地域社会にとってのジャウイ

一口にマレー世界と言っても、その内実は多様な地域から構成される。マレー語を通して外部の世界と関係を結びつつ、地域社会の中では別の言語が用いられている場合も多い。そうした社会では、言語や文字が多重的に存在することになる。

菅原は、19世紀のジャワを例にとり、複数の文字と言語がある種の序列をもって並存している状況を明らかにした。ジャワでは、アラビア語、マレー語、ジャワ語という3つの言語と、アラビア文字、ジャワ文字という2つの文字が状況に応じて使い分けられていた。

菅原は、こうした言語状況の中で起こった2つの動きをとりあげた。第一は、アラビア語の宗教書をアラビア文字のジャワ語に翻訳する一部のプサントレンの動きである。第二は、ジャワ文字表記のジャワ語で記録された宮廷文学を、アラビア文字表記のジャワ語に翻訳する宮廷詩人の動きである。アラビア文字表記のアラビア語文書、ジャワ文字表記のジャワ語文書は、それぞれイスラム教とジャワの宮廷という権威を担った文書である。両者は、ともにアラビア文字表記のジャワ語を正統でないものとしていた。

ところが、19世紀になって、これらの文書をアラビア文字表記のジャワ語に書き換える動きが相次いだ。菅原は、こうした動きを、プサントレンがアラビア語を理解しない人々にイスラム教育の対象を拡大しようとした動き、および宮廷詩人が宮廷文学にイスラム教の権威を付そうとする動きと理解できるとした。その上で、いずれの動きもジャウイ社会のイスラム化の進展に対応して行われたものと解釈した。

こうした多重言語・多重文字状況は、20 世紀に入っていっそう複雑なものになった。植民地統治にともなって、新たにローマ字表記が導入されたためである。

これと関連して服部は、20 世紀初めに見られた2つの動きを西スマトラの事例から明らかにした。第一は、イスラム教による近代化運動である。西スマトラでは、中東のイスラム改革思想の影響を受けて、20 世紀初頭からイスラム教育の近代化がはかられた。教育の対象を拡大すると同時に、ジャウィによる定期刊行物が発行されるようになった。第二は、植民地政府による公教育の開始である。植民地政府は、マレー語をローマ字表記し、辞書を編纂して言語の標準化を行った。ローマ字表記のマレー語が官製の教育機関で教えられ、公文書にも用いられるようになった。これにより、ローマ字表記のマレー語が読み書きできる人々がしだいに増えていった。マレー語がローマ字表記されることで、ジャウィ表記ではあいまいにされていた方言差が明確になり、ミナンカバウ語のように、その一部はマレー語と異なる地方語として見なされる結果となった。また、ローマ字表記のマレー語の普及により、オランダ領東インドではイスラム定期刊行物もローマ字で発行されるようになった。

では、なぜ植民地政府はジャウィを公文書や公教育の言語として採用しなかったのか。國谷は、植民地政府がジャウィを近代教育にふさわしくないと認識していた可能性を指摘した。第一に、ジャウィはマレー文学やその他の伝統文学を記述するものであるという考えがあった。第二に、ジャウィが植民地統治にとって脅威となるイスラム教について記述

するものだという考えがあった。國谷は、ジャウィに対するこのような見方が植民地主義者だけでなく研究者にも影響を与えてきたのではないかと結んでいる。

◆ジャウィ文書を読む

では、実際のジャウィ文書には何が書かれているのだろうか。ジャウィ文書の内容分析を行った山本の報告は、ジャウィ文書が宗教や伝統文学に限定されない様々な主題を扱っていることを明らかにした。山本は1950年代にシンガポールで発行されたジャウィ誌『カラム』を分析して、シンガポールのムスリムがインドネシアの情勢を見ながら、シンガポールやマラヤにおけるムスリムとしての自らのあり方を模索する場として『カラム』があったことを明らかにした。また、ローマ字表記が普及した現代においても、ジャウィというメディアは、非ムスリムの介入しない議論の場をムスリムが確保するという機能を持ちうることを指摘した。

ジャウィ文書研究は、緒についたばかりである。ジャウィはマレー世界を結んでいる。ジャウィを研究することは、マレー世界の様々な地域を研究する個別の研究者が情報や意見を交換しあうことでいっそう発展していくものと思われる。ジャウィを通じて、マレー世界の新たな姿だけでなく、マレー世界を研究する研究者の新たな関係も拓かれることが期待される。